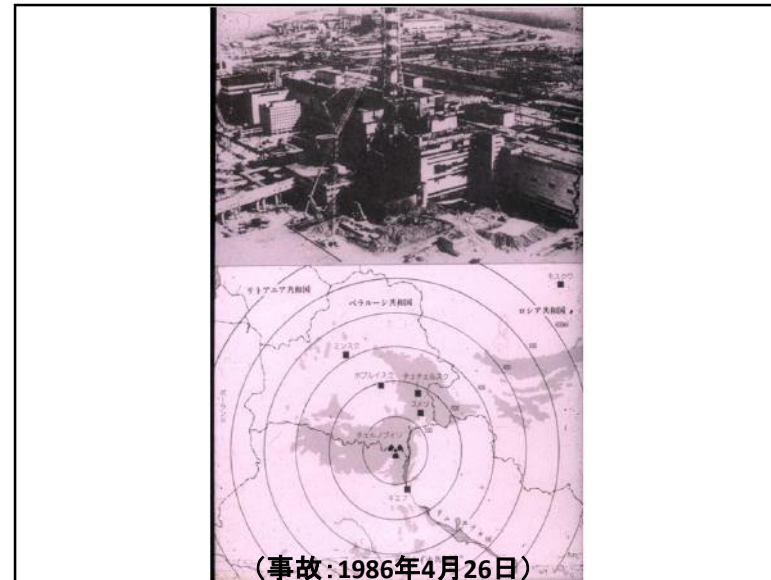


石川県保険医協会主催
〈原発・いのち・みらいシリーズ講演会〉

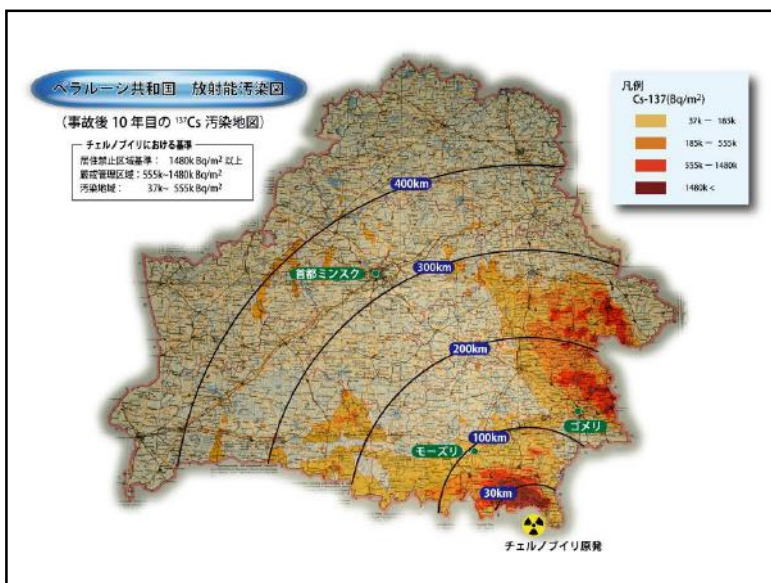
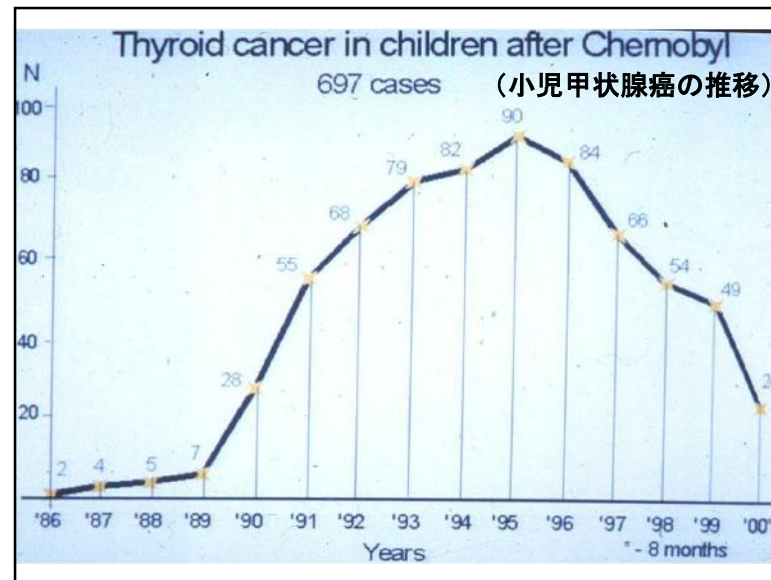
福島原発事故の小児甲状腺検査の問題点 —チェルノブイリ原発事故医療支援の経験を通して—

菅谷 昭
(2021年3月14日)





〈ミンスク市 国立甲状腺ガンセンター〉



—— 2016年 ——

チェルノブイリ原発事故から
30年が経過した節目の年。
私は自身の目で現在の姿を
確かめるため、7月初旬、
ベラルーシを訪れました。



ゴメリ州ベトカ地区<居住禁止区域>

今もって「進入禁止」の表示！
(高度放射能汚染区域につき立ち入り禁止)



村へ続く道路沿いの草木は手入れもされず伸び放題。
道路脇の空間放射線量は0.4マイクロSv/時。



「チェルノブイリの子どもたちを救う会」を訪問

チェルノブイリ事故による子どもたちの健康被害等の
実態調査や支援活動を継続しているボランティアの会



地区病院長の男性医師:「ベラルーシでは汚染地の子どもたちに毎年
1ヵ月程度の健康保養を、国の責任として無料で実施しています。
日本では何故そのような国家的プロジェクトを実施していないのか」

会代表の女性小児科医:「市民一人ひとりが放射能の影響や健康を
守るための手段について、より深く学ばなければいけません」



ゴメリ州立保健局を訪問

局長のワシロコフ医師と面会し、ゴメリ州住民の健康状況の現状について意見交換。懇談の終りに、局長は「国家は人々に対して背を向けてはいけません」ときっぱり！果して日本は一体どうでしょうか。

ベラルーシ共和国保健省母子部門部長 } の報告 ゴメリ州保健局副局長

汚染地域居住の子ども(6歳~17歳)に対し、国による年2回の定期健診を継続

- <1回目> 内分泌専門医の診察。併せて眼科および歯科検査。また必要があれば、小児科医の診察。甲状腺超音波検査、血液および尿検査等。ホールボディカウンターは希望者に実施。
- <2回目> 小児科医による健診が主体。必要があれば、甲状腺検診等を実施。

この定期的な診察や諸検査において異常が確認された場合には、国の上級医療機関にて更なる精査を実施し、適切な治療などが行われている。

その他の健康に対する国家的施策

◎汚染地で生活を継続している18歳以上の住民に対しても、年1回の定期健診を実施。

◎汚染地域に暮らす子どもたちに、毎年1か月、非汚染地での保養を実施。

なお、これらの健康管理対策にかかる費用は全て国家の負担としている。

福島原発事故後の今とこれからを考える

◎現在の福島の子どもの健康・甲状腺がんについて

- ・甲状腺がん:チェルノブイリでは、10年目に事故によると認定現段階では、「自然発生がん」と「放射線誘発性甲状腺がん」を、病理組織学的所見や遺伝子解析によって区別することは不可能。従って現時点で原因を特定することはむずかしい。今後の経過を注視していくことが大切(疫学的事実の集積が必要)。国や県においては、定期検査等にもっと力を注ぐべきである。
- ・非がん性疾患:長期的・持続的低線量被曝の影響を注視非がん性の健康障害に対しても、その対応策が不可欠(チェルノブイリ事故後の現状を考慮)。併せて関連諸検査結果の公表を強く願う。

甲状腺超音波検査の必要性

本検査の実施を、「過剰診断」という表現を用いて疑問視している県民健康調査検討委員がおられるとのことであるが、そもそも福島県において、なぜ小児に対してこのような集団的超音波検査が必要とされるかについて、深く考慮していただきたい。

2011年3月11日、福島第1原発で事故が発生したことによって、放射性物質による環境汚染の可能性がある地域における小児甲状腺への影響の有無について、長期にわたり経過観察を継続すべき疫学的調査としての必要性があるために実施するものである。

甲状腺超音波検査の意義

本検査の長期的観察結果は、今後、万一国内外において、新たな原発事故が発生した場合、小児甲状腺の健康被害対策における極めて有用な参考となる。併せて、福島原発事故による健康への影響に関する記録を残す意味においても不可欠な調査である。

外科的治療の適応

わが国の甲状腺関連学会等における甲状腺癌の手術適応の基準が定められていると考えられるので、その指針に従って適切な治療方針(甲状腺の切除範囲やリンパ節郭清等)を選択決定すればよい。

<甲状腺外科検討会:甲状腺癌取扱い規約>

Ⅲ. 発見動機による甲状腺癌の分類

甲状腺癌は発見動機により以下の4群に分けられる。

オカルト癌 occult carcinoma

諸臓器転移による臨床症状が先行するために原発巣を検索したが発見されず、その後それらの原発巣として甲状腺癌が発見された症例。

偶発癌 incidental carcinoma

切除あるいは摘出された甲状腺組織の病理学的検索により初めて発見された癌。

ラテント癌 latent carcinoma

生前臨床的に甲状腺癌の徴候が認められず、死後剖検により初めて甲状腺癌の存在を確認した症例をいうが、総論B.の項に従い、本規約の対象とはしない。

なお、オカルト癌、偶発癌、ラテント癌はその多くが微小癌であるが、長径1.0cmをこえる癌の場合もある。

臨床癌 clinical carcinoma

上記以外の癌、すなわち臨床的に甲状腺癌と診断され、組織診でも甲状腺癌が確認された症例。

終りに:私の小さなつぶやき

- ・ チェルノブイリ原発事故による人の健康や生活環境等への影響は、事故後35年経過した今もなお収束したとは言い難く、引き続き長期にわたる注意深い経過観察が不可欠であると思います。
- ・ 福島事故は、わずか10年が経過したにすぎません。チェルノブイリ事故後の汚染地の現状を教訓にして、残念ながら国の対応に期待が持てない以上、国民一人ひとりが放射能災害にもっと関心を強め、たとえ時間がかかろうとも、子どもたちの未来を守るためこの国難に立ち向かう時が到来しているのではないのでしょうか。チェルノブイリの現状は、福島の25年後の姿か……。